

古典の世界をのぞいてみよう！
―片渕須直監督最新作『つるばみ色のなぎ子たち』講演会―

『枕草子』の聴覚的表現

制作者

広島大学
実行委員

発行日

2025年11月28日

11 2025年
月号

一〇〇〇年前の足音は、「つるばみ色」か？

突然ですが、待ち合わせの相手が向こうからやってきた場面を想像してみてください。相手はどんな足音でやって来ましたか？「てくてく」「すたすた」「どたどた」……「とぼとぼ」や「のそのそ」と答える人もいるでしょう。このように現代には足音を表すさまざまな表現がありますが、それでは、一〇〇〇年前において足音はどのように描かれているのでしょうか。今回は『枕草子』より「時奏する、いみじうをかし」の章段を手がかりに、当時の足音について少し考えてみたいと思います。

同じ作品なのに内容が違い？

『枕草子』の作者が清少納言であることは有名ですが、残念ながら本人が書いたものは現存していません。いま私たちが『枕草子』を読むことができるのは長い間にわたって手から手へと書き写

してくれたおかげなのですが、手で書き写したために、それぞれの本によって内容の違いが見られます。そして、こうした内容の相違（異同）に応じて、現在の『枕草子』は三巻本系統、能因本系統、前田家本、堺本系統の四つに大きくグループ分けされています。このことを踏まえて、「時奏する、いみじうをかし」の章段における足音を見てみましょう。

編集者Tの

『枕草子』お気に入り章段

ただ過ぎに過ぎるもの
帆かけたる舟。人の齡。春、夏、秋、冬。

人生ではじめて買ってもらったスーツを着て、いつもより大人に見える自分にわくわくしながらパンプスをコツコツ鳴らしたあの日から、いつの間にか4年が経ちます。靴擦れに気づく暇もなく日々は過ぎ去っていくけれど、卒論の提出日も近くなっていくけれど、少しの焦りと、切なさ、もろい希望を抱きながら、本のページをめくって過ぎていく日々を大切にしたいです。提出日は、どうか過ぎませんように。

「時表する、「こほこほ」をかく」

◆三巻本系統第一類（陽明文庫蔵（旧二冊）本）

いみしうさむき夜中はかりなとこほこほとこほめきくつすりきて

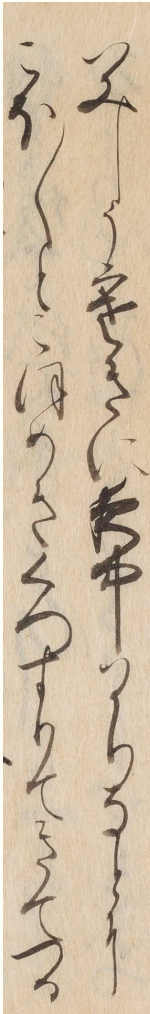
◆能因本系統（三条西家旧蔵本）

さむきに夜中はかりなとこほこほとこほめきくつすりきて

◆前田家本

いみしうさむきに夜中はかりなとこほこほとこほめきくつすりきて

いずれの本も、宮中で時刻を知らせるために、ひどく寒い夜中のころ「くつすりきて」、沓をすって歩いてきたときの音を「こほこほとこほめき」としているのが読み取れます（なお、堺本系統には章段そのものがありません）。ただし、当時の表記では濁音は表されないため、「こほこほ」「こほこほ」「こほこほ」「こほこほ」のいずれで読んだものかはつきりとしません。この問題を考えるために、現在刊行されているいくつかの注釈書の表記を見ていきましょう。



『能因本枕草子』（相愛大学図書館蔵）

出典：国書データベース（国文学研究資料館）

<https://doi.org/10.207330/100386642>

濁点「ん」はなぜ？

◆全講枕草子 「こほこほとこほめき」

◆新潮日本古典集成 「こほこほとこほめき」

◆新日本古典文学大系 「こほこほとこほめき」

◆新編日本古典文学全集 「こほこほとこほめき」

「こほこほ」「こほこほ」「こほこほ」とさまざまな表記があります。『日本国語大辞典』によれば、「こほこほ」は「物の鳴りひびく音を表わす語。雷や太鼓のなりとどろく音、物をたたいたり、こわしたりする音、咳の音など、さまざまな音を表現する」擬音語であるようすが（ちなみに、『源氏物語』において「こほこほ」は唐白の音（夕顔巻）や屏風をたたむ音（紅葉賀巻）、錠前を引っぱる音（朝顔巻）などとして描かれています）、沓をすって歩く音をどのような音とするか、注釈を付ける人のあいだでも解釈が分かれているようです。それでは、現代語訳においてはどのようにでしょうか。大学の文学研究で用いられる注釈書からソフトカバーの文庫本まで、さまざまなものを並べて見てみましょう。

現代語訳をみてみよう

◆全講枕草子

「ごとごとと音を立て、沓をすつて来て、」

◆新編日本古典文学全集

「ごとごとと音を立てて、沓を摺って歩いて来て、」

◆角川ソフィア文庫

「ごとごとと音を立てて沓を引きずって来て、」

◆光文社古典新訳文庫

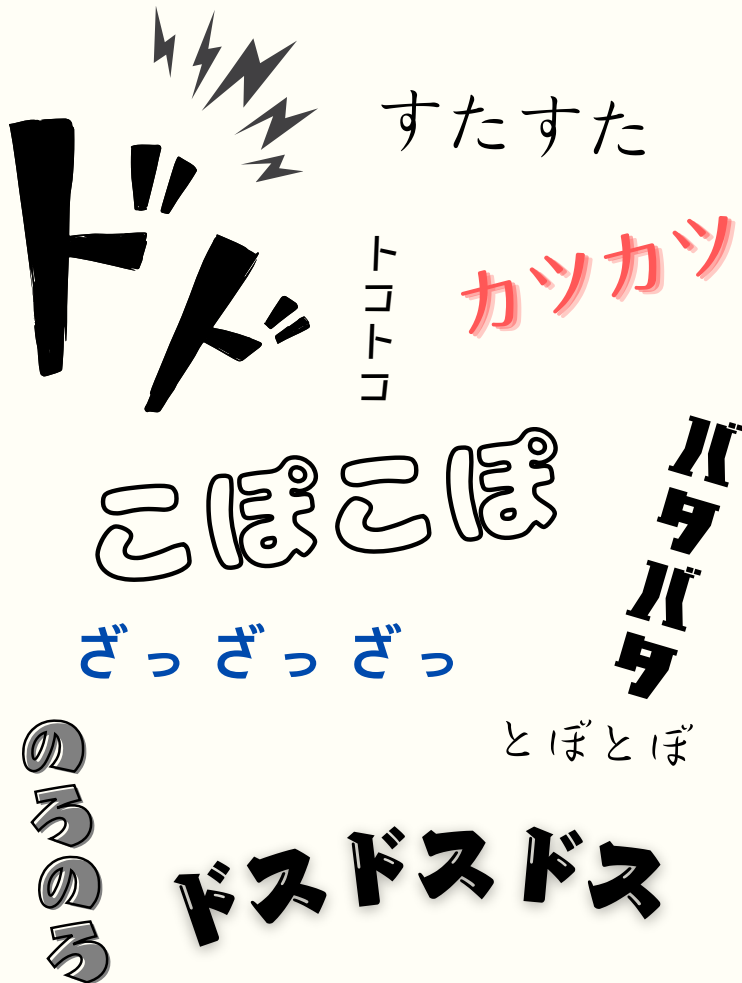
「ごとごとと沓を摺りながらやってきて、」

◆河出文庫・酒井順子訳

「ごとごとと音をたてて沓を擦って歩いてきて、」



いずれも「ごとごと」と現代語訳をしています。浅沓が木製（もともとは牛革製）であることを考えると「ごとごと」という重々しい音をあてたことにはある程度理解できるものの、古典本文の「こほこほ」からやや離れてしまっていることには疑問が残ります。



このことについて、片淵須直監督は中古文学会二〇二四年度秋季大会基調講演「『枕草子』はストーリーのある映像作品の底に敷くものとなり得るか」において、「こうして実際に履いて歩いた音を、先ほどの「こほこほ」に一番近いものとして表現してみようと思いますと、「こほこほ」なのではないか、となります。これまでの現代語訳ではやや抽象的な「こほこほ」と表記されることも多いのですが、「こほこほ」にはより質感的なリアリティがあります。」と述べておられます。足と浅沓とのあいだに隙間があり、歩くたびに「こほこほ」と鳴っているのだろうかと思いを巡らせながら、たいへん興味深く拝見しました。

ここまで、足音を手がかりにして『枕草子』の聴覚的表現を少しばかり考えてきました。今回は浅沓の音「こほこほ」にとどまりましたが、清少納言が聴覚美を重んじていることは『枕草子』の巻頭の一節「秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、……日入り果てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。」からもうかがうことができます。

聴覚的、また視覚的な美観によって感覚美を追求した清少納言の『枕草子』を、片淵監督がどのように受け止め、いかにして具体性を持ったアニメーション映画として描き出すのか。これから完成する映画を見に行くみなさんは、ぜひとも映像のみならず音響表現にも心を馳せながら、『つるばみ色のなぎ子たち』を楽しんでみてはどうでしょうか。

参考文献

- ・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集二〇源氏物語①』（小学館、一九九四年）
- ・阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集二十一源氏物語②』（小学館、一九九五年）
- ・池田亀鑑著『全講枕草子』（至文堂、一九六三年）
- ・石田穰二・清水好子校注・訳『新潮日本古典集成（第一回）源氏物語一』（新潮社、一九七六年）
- ・石田穰二・清水好子校注・訳『新潮日本古典集成（第十三回）源氏物語二』（新潮社、一九七七年）
- ・石田穰二・清水好子校注・訳『新潮日本古典集成（第十八回）源氏物語三』（新潮社、一九七八年）
- ・片淵須直「『枕草子』はストーリーのある映像作品の底に敷くものとなり得るか——中古文学二〇二四年度秋季大会基調講演演説記録——」（中古文学会編『中古文学』、二〇二五年五月）
- ・河添房江・津島知明訳注『新訂枕草子下』（角川文庫、二〇二四年）
- ・酒井順子訳『枕草子下』（河出書房新社、二〇二四年）
- ・佐々木和歌子訳『光文社古典新訳文庫 枕草子』（光文社、二〇二四年）
- ・瀬古確『日本文学の自然観照』（右文書院、二〇〇九年）
- ・田中重太郎編著『校本枕冊子下巻』（古典文庫、一九五六年）
- ・玉上琢弥『源氏物語評釈第一巻』（角川書店、一九六四年）
- ・玉上琢弥『源氏物語評釈第二巻』（角川書店、一九六五年）
- ・玉上琢弥『源氏物語評釈第四巻』（角川書店、一九六五年）
- ・萩谷朴校注『新潮日本古典集成（第十二回）枕草子下』（新潮社、一九七七年）
- ・松尾聰・永井和子校注・訳『新編日本古典文学全集十八枕草子』（小学館、一九九七年）
- ・柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『新編日本古典文学大系十九源氏物語一』（岩波書店、一九九三年）
- ・柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『新編日本古典文学大系二十源氏物語二』（岩波書店、一九九四年）
- ・渡辺実校注『新編日本古典文学大系二十五枕草子』（岩波書店、一九九一年）
- ・ジャパンナレッジ版『日本国語大辞典』 <https://japanknowledge.com/lib/shelf/ko>（二〇二五年十一月九日最終閲覧）